

キクの効率的電照技術の開発及び キク等の品種育成による花き産地振興

吉水（白山） 竜次 氏（60歳）

株式会社エルム BI事業部 参事
（元鹿児島県農業開発総合センター
副所長（農業研究担当））



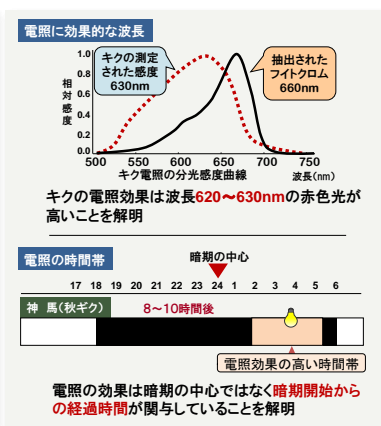
1 業績の概要

背景

キクは出荷量の最も多い最重要品目で、電照による開花調節が必須となっている。研究に着手した当時、CO₂排出量削減を求める社会情勢などから、生産現場において、白熱電球から電球形蛍光灯やLED器具などへの切り替えを進める機運が高まり、代替光源の選定と効率的な利用技術が求められていた。また、鹿児島県は全国有数のキク、テッポウユリの産地であるが、近年の気候変動、消費者嗜好の変化への対応策として新たな品種の育成が産地から望まれていた。

研究内容・成果

キクの生産現場は白熱電球から蛍光灯、LED器具への移行で混乱状況にあったことから、「どの波長（光質）」を、「どの時間帯」に、「どのくらいの長さ」で照射すれば最も効率がよいかを詳細に再解析し、全国のキク生産現場に対して新たな光源選択の指針と最適な効率的電照方法を提示した。また、鹿児島県産地の周年安定生産を目指して、早くから気候変動適応性に着目し、電照抑制が可能で耐暑性の高い夏秋スプレーギクを多品種育成した。さらに、明治時代から離島地域の経済を支えてきたテッポウユリについて、花容草姿の優れた鹿児島県オリジナル品種を育成した。



普及状況

キクの電照技術の確立については、光の波長や電照時間帯に新たな知見を見出し、論文発表するとともに、現場向けマニュアルを作成、公表した。作成されたマニュアルは現場で広く活用されている。

育成品種については、夏秋スプレーギクは24品種を育成し、離島を含む県内産地に広く普及している。また、テッポウユリは5品種を育成し、産地での栽培が広がりがつつある。これらの品種は市場評価も高く、産地振興に大きく貢献している。

2 評価のポイント

我が国の最重要花き品目であるキクにおける光周性花成の再解析に基づいた効率的な電照技術と関連知見は、専ら白熱電球を電照用光源として使用していた全国の生産現場に代替光源選択の指針を与えた。また、高齢化と後継者不足を背景に離農が進行する地域において、育成品種の導入による花き生産振興は産地活性化につながり、経済面だけでなく社会面からも地域振興に貢献していることを高く評価した。